

これからイモの時代が、きっと来る！

～イモプロジェクトを起ち上げた東大生・田口一輝君～

川越いも友の会 事務局長

やま だ えい じ
山 田 英 次

1 はじめに～若い方の意識変化～

私たちが約40年前に、サツマイモの振興活動を始めた時には、おイモに対するイメージの評価が低かった。川越でサツマイモの保存文化活動をスタートした時には、マスコミより「イモ復権活動」などと言われ、埼玉県は県の形がおイモに似ていて「ダサイタマ」などとも言われた。また「いもねーちゃん」なる揶揄した言葉も残っていた。

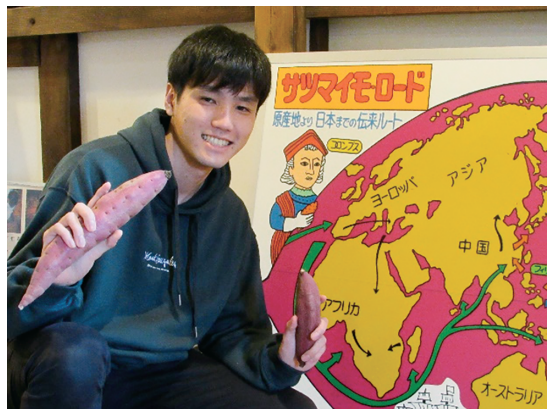
しかし、最近の傾向をみると、おいも好きの若い女子が増え、美容ダイエット食として食べたり、都内で焼き芋の大イベントが行われたり、お洒落なおイモの専門店が次々と現れるなど、イメージが昔と大きく様変わりした。

そんな中、イモ類の、将来への可能性と魅力を見出し、IMO project（イモプロジェクト）を起ち上げたのが、現在、東京大学農学部4年生の田口一輝君だ。

2 東大生・田口一輝君とは…

平成9年（1997）生まれの田口一輝君は茨城県つくば市出身で、現在、東京大学農学部国際植物資源科学研究室（指導：加藤洋一郎教授・作物栽培学）に所属する4年生である。西東京市にある生態調和農学機構の田無試験地に通り、農場でイモの研究

を行っている。趣味は、テニスと大学に入ってから始めたという古武術（鹿島神流：剣術と柔術を中心とした総合武術）で、また最近は自身の農場で栽培したサツマイモを焼き芋にして冷凍ストックし、毎日朝食で食べているという。そのおかげで、とても快腸であるという。印象は背が高く、思慮深い雰囲気を持ちあわせた行動力のある好青年である。



イモ類の魅力と将来の可能性を熱く語る東大生・田口一輝君
（川越のサツマイモまんが資料館にて）

3 なぜ、イモプロジェクトを？

なぜ、イモ類に興味を持ったかを聞いたところ、大学の理科二類に入学してから、以前より「農業と環境保全」に関心をもっていたため、まず一年間は休学して、農家のところへ行って実際に働いたり、海外(中

国・アメリカなど）に行き農業と環境保全のボランティアをしたり、農業や環境保全の著書類を数多く読み漁ったりしたという。そのなかで「イモ類は、作物としてすごい！」と知ったという。特に深く感銘を受けたのが『サツマイモの世界 世界のサツマイモ』（山川理著）だったため、山川理先生に直接会いに行き、話を聞いたという。

大学の農学部で応用生命科学課程をとって、作物の全般を学習しながら、更にイモ類の知識を深め、2学年になった2018年4月に、有志3名で「IMO project」の学生サークルを立ち上げた。



学生団体「IMO project（イモプロジェクト）」のマーク

その目的は、イモ類を自分たちで栽培し、料理し、食べて、学び、その魅力を発信することを主目的とする学生団体であり、ホームページもある。キャッチフレーズとして「芋が世界を救う」をテーマにうたい、さらに、団体の理念も掲げられており、その要約は、①世界の人口増と飢餓に伴う食糧問題への対応作物、②イモ類の持つパワーと飢餓を救ってきた実績（乾燥地やヤセ地で素人にも栽培できる環境適応能力）、

③知られていないイモ類のいろいろな魅力を多くの人に知っていただく、などが掲げられている。現在、20数名で運営し、イモ類に関して様々な活動を行っている。

4 イモプロジェクトの実際の活動

具体的な活動は、主に茨城に有する圃場や本郷の弥生キャンパス内の圃場で、実際に、ジャガイモ、サツマイモ、サトイモ、キャッサバ、ヤーコンなどのイモ類を栽培し、その栽培したイモ類も使用して月に1回の「芋を食らう会」を開き、更に、イモ類を勉強する「芋ゼミ」（会員の自分たちで発表）、農家や企業・研究機関などの訪問活動、大学祭の「五月祭」や「駒場祭」への出店などであるという。

芋を食らう会では、各種イモの食べ比べや創作料理を当番制で行って楽しみ、大学祭では、芋煮、焼き芋、サツマイモのスムージーなどを販売して楽しんだという。訪問した関係先は、茨城県のイモ農家や、ポテトかいつか、カルビーなどの企業等とのことである。



「芋を食らう会」月に1回、イモ類の食べ比べや創作料理を楽しんでいる

現在、2020年はコロナ禍のため、栽培の外は、残念ながらオンラインでの活動がメインとなっている。



「芋ゼミ」各自が調べてきたことを発表する自主的な勉強会活動

5 特にサツマイモをメインに研究

田口君自身としては、イモ類を勉強した中で、一番サツマイモに関心を持ち、4年生の卒業論文研究テーマもサツマイモであるという。なぜ、サツマイモかと聞いたところ、①サツマイモは単位面積当たりの太陽エネルギーを吸収する力がひとときわ高く、生産量が高い多収作物、②干ばつや自然災害にも強く、ヤセ地でも育つ、③地面を覆って雑草にも負けない、④素人でも比較的容易につくれる、⑤毒がなく、準完全栄養作物、などであるという。

現在、田無試験地にて、約50m×5畝に、

ベニアズマ、ベにはるか、高系14号、コガネセンガン、すいおう、ふくむらさき、の6品種を実験栽培し、「茎葉と塊根の総合利用」、すなわち、葉や茎、イモも含めたトータルな栄養成分の研究分析を進めている。総合利用のための論文としてまとめ、新たな評価をしたいと意欲を燃やしている。



西東京市にある田無試験地にてサツマイモ栽培を行う田口一輝君

6 これから将来は、何をを目指すか…

最後に、卒業後はどうするのか、将来はどうなりたいのか、を尋ねたところ、卒業後は大学院に進み、さらにイモ類の研究活動を推進したいという。特に茎葉を含めた研究により、隠れ飢餓（栄養の偏りと不足）を救うことに貢献したいともいう。将来は、発展途上国（アフリカなど）へ行き、イモ類の研究を通して、食糧問題や環境問題の解決に貢献したいと強く夢みている。

今後、いろいろな壁があると思えるが、世界へ大きく飛び立つイモ類研究学者になって欲しいと、心から思った。